

2006年号

青峰同窓会会報



オハイオ州コロンバスでのインターンシップと
カナダ・ジョージアンカレッジ語学研修

contents

1	会長挨拶	2
2	卒業生便り	2
	2-1 稲岡 丈夫 (46M).....	2
	2-2 山本 俊二 (47E).....	3
	2-3 山田 基宏 (h11E).....	4
3	学科近況	5
4	新任卒業生教職員	10
5	退職教職員	11
6	SHTN便り	15
7	笠井幸郎先生との思い出二つ	16
8	会計報告・会計予算	16
	編集後記	16



会長挨拶

青峰同窓会会長
小手川 智 (42C卒)



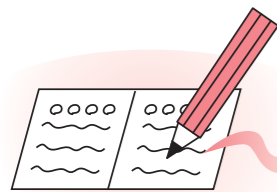
同窓会会員の皆様におかれましては、お変わりなくご健勝のこととお慶び申し上げます。2006年の同窓会会報をお届けします。

今年3月に母校の第40回卒業証書授与式が行われました。めでたく215名が卒業されて新会員となり約6,000名規模の同窓会となりました。第1期生が卒業したのが昭和42年でした。その1期生の大多数の方が今年還暦を迎えます。歴史を感じます。最近お会いした同窓生との会話の中でこんなことが話題になりました。母校を訪問しようとして校門の前まで来たが、よくよく考えてみると学生時代にお世話になった恩師の方々が既に退官されて、行き場のないことに気がついた。校舎の中まで入って、中を見たかったが入る勇気が無く校庭をぐるりと回って帰った。なんとも淋

しい話ですがこれが普通なんでしょうね。

卒業生にとってみれば母校の記憶や頭の中の映像は卒業時のところで止まっているようです。恩師の方々は卒業時と同じように私達を待っているかと錯覚しています。

卒業生の高齢化(認めたくないが現実)が進むと更に学校とは人的にも疎遠になっていきます。母校が敷居の高いところになっていくように思います。「母校に行けば暖かく迎えてくれる何かがあると良いね」とその同窓生は話してくれました。卒業生と母校を結ぶ役割を担っていくのが同窓会だと痛感しました。何をしたら良いのか皆様と考えていきたく思います。最後になりましたが同窓会会員の皆様のご多幸を祈念してご挨拶とします。



卒業生便り

同級生Blog開設 稲岡 丈夫 (46M卒)

母校を卒業して35年になります。幸い会社生活で情報処理畑を歩んできた経験をもとに、「同級生Blog」を開設しました。ちょうど私達の年代は、高度成長時代の落し子でして、不幸なことに社会的には、勤務先などで日常的にインターネットやMailをお使いの方を除いて、高度成長と情報処理技術革新の影響で情報化に取り残された方が比較的多い世代と言っても過言ではありません。母校での教育成果もあってか各々の分野でひたすら仕事一筋に邁進してきたのです。

私達より上の世代の方は、既に現役を引退され、時間だけはタプリーありますので、熱意と体力さえあれば、パソコンの習熟は難しくはないですし、逆に私らより下の世代は、早くから義務教育の過程でパソコンに親し

んできました。今でも覚えていますが、卒業研究では、まるで「デスクトップ形の」電卓で懸命に応力計算していました。パソコンの登場なんて夢にも思いませんでした。『卓上式電子計算機』だ

からこれでいいのかも知れませんね。今でも、パソコンを前にすると、電子工学を中核にして、機械、電気、化学、材料工学などの技術の集積で、そのことは、ある意味では私らの努力の結晶じゃないかと思うほどです。

私にとって、パソコン教育や掲示板の管理は経験がありました。同級生対象のBlogの管理というのは初めてでした。同級生というのは、限定されたメンバーであるというだけでなく、相互に「昔を知っている人ばかり」ですから照れもあつたり、かと云って下手なこともしにくく、なかなか投稿されないか、あるいは、皆が慣れるまでに時間がかかるであろうことは、想定内の範囲内でした。

しかし、有り難いことに。杞憂に終わりました。恩師をはじめ、久しく消息が途絶えていた級友からも、徐々に投稿が寄せられ、中には無遠慮な記事もありますが、無邪気ながら和気藹々のうちに旧交をあたためています。恩師の投稿で、我に帰ることもしばしばです。他のBlogやBBSには見られない独自の雰囲気の中で、懐かしさもあって心は学生時代に帰って皆で楽しく共有しています。例えば、近況スナップ写真での投稿はもちろん、「声の便り」なんてのは、このBlogならではのものです。



『私の原点』 山本 俊二 (47E卒)



現在の自分と高専にいたころの自分、その間に積み重なった時間、この三つのものを、一度少し埋めてみたい、そんな思いがこの散文のスタートラインである。

鈴鹿高専を卒業したのは1972年3月。小さな時計と卒業証書を小脇に抱えての白子の町からのお別れであった。私は6期生、私が入学した年に初めての鈴鹿高専卒業生が世に出ている。以来34年の月日が流れ、現在の私に至っている。

鈴鹿高専に入学したいと思っていた私は、当時中学二年生、草津中学のバスケットボール部主将であった。部員の減少の危機に何度も見舞われ、また対外試合に一度として勝つことのなかった弱小部であったが、練習だけは放課後毎日欠かすことなく続けた。バレーボール部・体操部・卓球部と共に体育館の主であった。実力低迷の部であったが、どういう訳か学年トップテンにはいる勉強のできる優秀な先輩たちがいた。その先輩の一人が鈴鹿高専を志望、見事合格。これを見た後輩たちが後に続けたいと思うのは自然の道理、私も後に続くことを決めた。理科の電気実験が好きだったこともあり電気工学科を志望、担任の先生の勧めもあり、進路を鈴鹿高専に決定。今にして思うと、高専入学に備えよく集中していた。中学三年生の秋頃から、クラブ活動を無理やり卒業させられ、時間が比較的とれるようになっていた。夕食後、たぶん3時間くらいだと思うが毎日勉強した。当時FMラジオでジェットストリームという番組が午前0時ころあったが、これが始まるのを潮に、眠りにつく毎日だった。正月があげて比較的早い時期の入学試験には遠方のため泊りで挑戦。ジェリー藤尾に似た引率教官と共に初めて鈴鹿高専を見た。中学の敷地しか知らない私には、とてつもなく大きいところに見えた。一緒に受験した者皆がそう思った。草津中学からの挑戦者全員が合格はできなかったが、私は入学が決まった。

三月末日、全寮制青峰寮に入寮するため、大き目のバックひとつ抱えての草津駅からの出発。何人かの友達が駅まで見送りにきてくれた。おまえは来月から生徒ではなく学生だなど、うらやましがられての出発。

寮に到着した日、さすがに寂しかったが、四人ごとに区切られたブースのリーダーだった二年生の稲岡さんが面白い人で、寮生活は二日目からばら色になった。朝のラジオ体操が嫌いな連中は多かったが、私は苦にならなかった。今でも乾布摩擦の習慣を冬場に行っている。寮生活では大人の話も覚えていった。

入学した学科は電気工学科、二年生までの担任は一般教養の先生であり、私たちは英語の杉浦先生だった。

42人のアットホームなクラスだったが、家を離れての勉学の場であり、当時15歳の少年たちは様々な問題を抱えていたはず。杉浦先生は常に優しく、また、毅然として我々に接してくださった。週末、白子の港で、釣り糸を垂れる先生の姿をよく見かけたものだが、我々には感知できない様々なストレスをお持ちだったに違いない。

三年生からは専門課程となり担任は今亡き杉野先生。合掌。それは君たちだけの考えだよ、との掛け言葉で、いつも我々と同じ目線に立ってくださった。高専開学以来の学園紛争によるロックアウトと自宅待機も杉野先生とともに経験した。心に焼きつく大きな出来事だった。先生のご冥福を祈る。

高専生活で私の大半の時間を支配したのがクラブ活動。中学での団体競技であるバスケットボール部から、個人競技の最たるものである陸上部に入部。中学で勝つ経験ができなかったのは、団体競技で足を引っ張られたためとの思いからの個人競技への転出決意であったが、この私の考えが間違っていることに気づくのにさほど時間はかからなかった。当時の陸上部には、競技のみならず学業優秀な先輩、人間として魅力ある先輩がたくさんいた。一流になるためには、一流に接せよとよく言われるが、陸上部の人材がまさにそれであった。



何かが違う、そんなところをたくさん持った先輩たちである。競技そのものでぱっとしなかった私であったが、優秀な先輩諸氏は分け隔てなく話を聞かせてくれる。私からも積極的に話しかける。卒業してからのほうが実は楽しい。勝田先生とも会えるOB会は、いつも私の楽しみである。OB会の場所は、思い出の詰まった白子の「西野」が最適と思うが、まだ営業を続けているかは知らない。考えてみれば、もっとも多感な時代を白子の町で過ごしたのだとつくづく思う。キーワードが次々に心に浮かんでくる。白子駅、旭ヶ丘、大東紡、白子海岸、電電公社、青峰寮、朝の点呼、深夜自習室、遠泳、マラソン大会、高専祭、一流の教官、紛争、ロックアウト、下宿、歴史の講義、保健室、大王での鯉節アルバイト…それぞれの言葉の

中に思い出が詰まりすぎている。いろいろなことを打算なしで語れる友人ができたことも付け加えなければならない。

昨日のこのように思い出されるこれらの出来事と、中学生までの草津での生活が、現在の自分の心の原点を作り上げていると感じている。

5年間を同じクラスで濃密に過ごし、1972年に共に卒業した42Eのクラス仲間は、既に3名がこの世の人ではない。田口君、長谷川君、光永君。残念である。

私自身は、私自身が生かされる場で、明日を信じて進むのみ。

溶射の研究者 山田 基宏 (h11E卒)

鈴鹿高専同窓生の皆様、如何お過ごしでしょうか。先日、在学時の指導教官であった北村先生とメールのやり取りをしている中で今回の同窓会報原稿執筆の依頼があり、拙文では御座いますが近況報告をさせていただきます。

私は平成11年に電気工学科を卒業後、専攻科に進学、その後さらに生物応用化学科の岩田先生の紹介で豊橋技術科学大学生産システム工学専攻修士課程へ進学しました。このとき、それまでの北村先生の研究室で専門としていた半導体、LSIとは全く異なる『溶射』というプロセスについて主に研究している機械・材料系の研究室に所属することになりました。しかし、実際にものをつくるという加工技術に関する研究が気に入り、研究室の教授や雰囲気も良かったことから、修士課程、そして博士課程へも進学し『溶射』に関する研究を続けました。

高専を卒業し、エンジニアとして活躍されている卒業生の皆様でも何人の方がこの『溶射』をご存知でしょうか。私もこの研究室を訪れるまでは聞いたこともあり

ませんでした。この『溶射』は簡単に言うと、金属などの粉末をプラズマや炎の熱で溶かしつつ、基板に吹き付けることによってコーティングするという、成膜技術の一種になります。写真1は減圧プラズマ溶射装置のプラズマ部分の写真を、



写真1

形成することによって、材料の防錆、防食、耐摩耗性の向上や新たな機能の付加などが可能になります。

話がだいぶ逸れてしまいましたが、『溶射の研究者』として歩みだす一方、プライベートとして、修士課程在学中に結婚、博士課程修了時には2児の父となっております(写真2 左から私、長女、長男)。「学生で結婚して2人も子供がいてどうやって…」とよく聞かれますが、やはり大変でした。しかし、今年の4月に無事博士課程を修了し、やっと社会人の仲間入りとなりました。ただし、勤務場所は学生時代と同じです。現在は豊橋技術科学大学の接合加工研究室で助手として勤務しております。助手となった現在も研究内容は『溶射』に関するものであり、『溶射の研究者』として日々邁進しております。

『溶射の研究者』となった現在、『溶射』技術の進展のための研究開発を行うことはもちろん、もう一つの課題として『溶射』の認知度を上げたいと考えております。同窓生の皆様、この機会に『溶射』という言葉だけでも覚えて頂ければ幸いです。そしてもし、興味をもたれましたらいつでもご連絡ください。相談・問い合わせ等大歓迎です。是非一度、私の研究室ホームページを訪れてみて下さい(<http://ajp.pse.tut.ac.jp/>)。最後は『溶射』の宣伝ばかりになってしまいましたが、同窓生の皆様の更なる発展とご健勝を心よりお祈りし、簡単ではありますが、私の近況報告とさせていただきます。



写真2

学科近況

一般学科の近況 奥 貞二 (45C卒)

一番大きな変化は、100分授業がスタートしたことです。8時50分に始まり、終りが4時40分と、授業時間が1日当たり40分延長されました。今年1年間は、試行期間ということで、教授方法、効果的な授業の進め方、学生の反応調査と色々検討がなされ、より充実した授業への取り組みが始まったばかりです。次は、国際化に対応できるように、今年から第2学年の研修旅行は、韓国に行くことになりました。11月7日から10日までの3泊4日。ソウルと慶州を訪問予定です。もう一つ看護師の小椋恵子さんが7月31日で退職され、毛利好子さんが新しく担当されることになりました。

さて一般学科の現況報告です。長瀬先生が定年退職され後任に大貫洋介先生が着任されました。長瀬先生は、非常勤講師と野球部の指導で、学校にいられています。加えて、高専間の教員交流ということで、鳥羽商船から数学担当で佐波学先生が来られ、1Eを担当され、細野第1学年主任の下で、熱心に教育活動と学生指導に精励されています。

次は英語科ですが、斉藤園子先生が、大阪大学内地研

修で、研修されています。三上先生の後任の目下先生は、目下専攻科学生のTOEICの英語力upに奮闘されています。

理科は、田村先生が教授昇任されました。土田先生は、学生主事2年目ということで、奮闘されています。今年の高専大会も、14種目東海1位で、全国大会に駒を進めました。主な優勝種目は、陸上、剣道、バスケット、バドミントン、ソフトテニス、バレーボール女子、バスケットボール、サッカー、空手といったところです。

体育は、宮崎先生が復帰され、いつもの賑わいを見せています。細野先生が第1学年主任で、奮闘されています。

人文社会は、変更ありません。西岡図書館主事が、張り切って色々新しい試みに取り組みられています。図書新聞を発行されたり、夏休み恒例の読書感想文を、少し変えて、感想文部門と、エッセー部門に分けられ、自己発表、コミュニケーションの訓練の場とされようと努力されているところです。

世の中は、少子高齢化に突き進んでいます。お互い健康に留意され、それぞれの持ち場で、鈴鹿高専の発展と、自己の技術力を生かした、社会貢献、企業貢献と、自己研鑽、自己成長のためにもう一步努力を積み重ねましょう。

機械工学科の近況 藤松 孝裕 (62M卒)

機械工学科および本校の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。さて、本年度も機械工学科の近況を報告せよとのことなので、例年と同じように簡単に紹介させていただきます。

はじめに、機械工学科での人事異動ですが、17年度におきましては岡田 修 教授が定年を迎えられ、大井 司郎 助教授が健康上の都合で退職されました。両教員におかれましては教育活動に多大な貢献をされており、本学科のみならず全学職員からも惜しまれております。後任としては、流体→材力→加工という複数の専門を渡り歩いてこられた佐脇 豊教授(前 三重大学)が本年4月より教鞭をとられており、機械工学科の守備範囲が一段と広がったように思います。

現在在職しているスタッフの氏名および実験室名は右表に示すとおりであり、その他、澤辺 昭廣 技術専門職員、谷川 義之 技術職員の総勢12名において機械工学科での学生教育・指導や研究活動に取り組んで

おります。本校には、高価な研究設備も設置されていますので、卒業生の皆様におかれましては、会社での問題点等が本校に設置されている研究設備を使って解決できるようであれば、気兼ねなく一声おかけください。参考までに、相談可能な研究テーマに関するキーワードを表内に併記しております。また、お近くにお越しの際には是非一度お立ち寄りください。(仲野雄一先生は、9月に静岡理工科大学へ移られました。)

実験室	教員名	キーワード
メカトロニクス	富岡 巧	無限軌道車両、画像処理、センサ融合、マイコン制御
知能機械システム	白井 達也	柔軟関節ロボット、非線形バネ、福祉機器、多指ロボットハンド
精密工学	打田 元美	接触問題、精密加工、圧力分布、表面精度、トロイボロジー
機能加工	佐脇 豊	切削工具の温度推定、レーザー加工現象のシミュレーション
材料力学	末次 正寛	衝撃破壊、超音波、音弾性、衝撃波の伝ば、超高速撮影
固体力学	埜 克己	構造解析、動的応答、材料粘性、流体との連成、網糸の強度
流体工学	近藤 邦和	自吸式ポンプ、流れの可視化、ボンドグラフ、ソーラーカー
熱工学	藤松 孝裕	液体の微粒化、気液界面現象、衝撃挙動、微小液滴、気液二相流
機械力学	民秋 実	平面二軸加振、竹繊維強化複合材料、振動モード解析

電気電子工学科の近況 北村 登 (47E卒)

まず、今年3月には山本先生が定年退職されました。山本先生は大阪大学から本校に来ていただいてから、電気工学科では高電圧関連の設備の充実、全学的には専攻科長としてJABEE認定に向けてのいろいろな面での整備など大変なお仕事をなされました。また先生は学生とのふれあいを大切にされ、授業などもその準備に多くの時間を費やされて見えました。4月からは大阪から週1日、非常勤として授業と実験を担当していただいています。残念ながら前期のみですので、この会報が発行される頃には学校へは来ていただけていないと思います。(この会報の「退職教職員」に先生の文章が載っていますので、そちらもご覧ください)

その山本先生の後任として、豊橋技術科学大学から西村一寛先生に来ていただきました。西村先生は大阪府立高専の出身で高専のことをよくご存じで、今までの経験を鈴鹿高専の学生のために役立てていただけていると思います。今回は原稿を書いていただきましたので、そちらをお読みください。

花井孝明先生:鈴鹿高専に赴任して6年目になりました。現在、学科主任を務めています。今年は就職希望者25名に対して600社を上回る求人があり、約8割の学生が第1希望の企業に就職することができました。

鈴木昭二先生:良い先輩、同僚、後輩を見つけたら、それらの人々を大切に、一生友達でいられるよう努力しましょう。

近藤一之先生:鈴鹿高専初の海外インターンシップの引率で、オハイオ州コロンバスに8月7日より9月20日までの予定で出張中です(でした)。朝、実習先へ行き、様子を見た後は一人で過ごすことが多く、夜(日本は昼間)はメールが入ってくるのでその処理のため日本語で読み書きすることばかりで、全く英語は上達しませんでした。残念。

伊藤保之先生:1期生と同じように今年の4月に還暦を迎え、定年退職まで後3年半になりました。卒業生は是非、研究室に立ち寄ってください。

中野荘先生:現在3Eの担任を任されています。以前と違い学生の気質も変わっており、特活など大変です。何事も体が資本ですので、健康に留意して頑張ってください。

奥田一雄先生:現在、学生主事補として学生会活動の支援を主に担当しています。オープンカレッジや高専祭など多くの行事が開催されていますので、それらを機会に来校されてはいかがでしょうか?お待ちしております。

川口雅司先生:色々とお世話になり有り難う御座います。月日の経つのは早いもので私も高専へ赴任してから14年ほ

ど経ってしまいました。今後ともよろしく願い申し上げます。

奥野正明先生:卒業生の皆様、お元気ですか? いろいろな職場でご活躍のことと思います。私のほうも毎年若いエネルギーに接し頑張っています。学校の方に来たときは気軽に寄ってください。バドミントン部の後輩たちも頑張っていますよ。

柴垣寛一先生:鈴鹿高専に来て2年半が経ちました。教育と研究のはざままで試行錯誤する毎日です。求められるものがだんだんと増えてきていますが、着実に進めていくしかありません。電気電子工学科として恥ずかしくない人材の育成を目標にがんばります。

鈴木昌一技術専門職員:ここ数年、授業(実験)だけでなくソーラーカー活動や産学連携活動などにも関わり毎日忙しい日々を過ごしています。

卒業生の皆様も忙しい日々をお過ごしかと思いますが機会がありましたら学校にもお立ち寄りください。

山田太技術職員:同窓会の皆さん、山田(家崎)です。私も鈴鹿高専にお世話になって14年目を迎えました。いつの間にか中堅?気がついたら年齢だけが中堅。中身はまだまだ半人前です。でも、日々一生懸命頑張っております。機会がありましたら、卒業生の皆さんも近況をお聞かせ下さい。

北村登:早いもので人生の半分近くを高専で過ごしたことになります。ずっと続けているのは、奥田先生と一緒に担当しているラグビー部との関係ですね。

そして、今はちょうど学科生が夏休み期間中ではありますが、中学生を対象としたものづくり体験教室「やさしいエレクトロニクス教室」が開催され、ボランティアの学生らと共にブレッドボードや半田ごてを使って電子工作を作製しつつ、本校の紹介を行いました。今年は応募者が定員の2倍になるなど盛況でした。9月には、小・中学生、保護者および一般市民を対象にしたオープンカレッジ「たのしい電気遊学会」、10月末にはおいん鈴鹿フェスタ「作ろう楽しい電子回路」、毎年冬に小学校で行われる出前実験教室など様々な公開講座が電気電子工学科で企画されておりますので、皆様にも是非御参加下さいませよう願ひ申し上げます。

最後になりましたが、皆様の御清栄と御多幸を心よりお祈り申し上げますと同時に、鈴鹿高専の今後の取り組みに御支援と御協力をお願い申し上げます。本校広報誌「鈴風」の新任紹介で今後の抱負を記載させて頂きました。併せて、お読み頂ければ幸いです。

電子情報工学科の近況 長嶋 孝好 (48E卒)

卒業生の皆さまには、いかがお過ごしでしょうか? 学生の就職やインターンシップ等では、いろいろとお世話になり、ありがとうございます。まず、教職員の「声」から、いくつかの近況報告・メッセージを、お伝えしたいと思います。

伊藤 明:2006年10月から5ヶ月間、米国オハイオ州立大学(OSU)へ出張することになりました。本校から文部科学省に予算申請し採択された『CO-OP WORKによる国際的技術者教育 異文化コミュニケーションに優れた、愛され信頼される実践的技術者の育成』に関する共同研究のためOSUに伺います。今後一層、国際的に活躍できる技術者が世の中から要求されることと思われます。皆様の更なるご発展をお祈り致しております。

箕浦:第4学年工学実験の情報系では、できるだけその時々々の話題になっている技術を取り入れたテーマを設定しています。近頃はweb2.0が注目されているということで、webアプリケーションの基礎技術をテーマにしています。準備するのは大変ですが、学生が興味を持って取り組んでくれているようなので、苦労のしがいがあります。

田添:鈴鹿高専に就職して14年目、もうすぐ38才、とうとう学生とのジェネレーション・ギャップを意識するようになってしまいました。授業の合間の雑談でも、笑ってくれる学生の数明らかに減ったような…そんなときに卒業生との会話はホッとできますね。まだ精神年齢が近いということ!?いつでも鈴鹿高専に遊びに来てください、楽しみにしています。

吉川:今年度は3年生の学級担任を仰せつかっております。学生の学習へのモチベーションを高めるためにも、卒業生の方々のご活躍を特別活動等でどんどん紹介していきたいと考えています。皆様のご健康とご活躍をお祈りします。

長嶋:研究室の学生は4名(全員5年生)で、遺伝的アルゴリズム、音声認識、仮想実験、マルチエージェントに関するテーマで研究を行っています。教務関係の仕事で、お知らせすることとして、4年後期の新設科目「数値計算」を平野先生が担当されます。また、「情報理論」が4年後期から開講(吉川先生担当)されるようになります。

井瀬:今年の夏は一斉休業で一週間休みましたので、久しぶりにリフレッシュしました。今年の「2πの日」はリーフパイで祝っています。皆さん、お祝いに研究室まで来て下さい。

学科主任は、引き続き井瀬先生が担当してみえます。また、副校長・教務主事として齋藤先生、専攻科主任として桑原先生、クラス担任として吉川先生(3年)、伊藤八十四先生(4年)、箕浦先生(5年)が担当されています。低学年の担任は、中井先生(1年)と小倉先生(2年)です。

今年度のインターンシップ履修学生は28名(4年生52名中)で、23事業所にお引き受けいただきました。地域別では、三重県(8社)、愛知県(7社)、東京都(4社)、大阪府(2社)、兵庫県(1社)等、でした。次年度も、さらに多くの学生諸君が有意義な体験をできるよう期待したい

と思います。

就職・進学については、現時点(9月)で、就職希望者16名、進学希望者は21名です。就職希望者については、全員内定をいただいております。また、進学の合格者(複数大学等合格の数も含む)については、鈴鹿高専専攻科(8名)、三重大(6名)、名古屋大学(2名)、名古屋工業大学(1名)、豊橋技術科学大学(9名)、岐阜大学(2名)、京都大学(2名)、大阪大学(1名)、筑波大学(1名)、富山大学(1名)、長岡技術科学大学(3名)、広島大学(1名)です。

各種コンテストへの学科学生の参加についてお知らせしましょう。まず、「プログラミングコンテスト」について。今年度は茨城高専の主管で実施されます。これには、課題部門1チーム(箕浦先生の指導)、自由部門2チーム(田添先生、吉川先生の指導)、競技部門1チーム(渥美先生の指導)、が参加します。次に、「パソコン甲子園」には、3年生2名からなるチーム(プログラミング部門)が、予選3位という好成绩で通過しました。本選は11月11日と12日に会津大学にて開催されます。さらに、「Imagine Cup 2006世界大会」へ、3年生1名を含む日本チーム(ソフトウェアデザイン部門)が最終決戦(6チームが参加)に進出し、優秀な成績を残しました。(なお、今回の世界大会は、インドで開催されました)

最後に、学科のホームページ(www.suzuka-ct.ac.jp/info)においては、「卒業生の皆さまへ」などで有益な情報を提供したいと考えています。ときどき覗いていただければ幸いです。また、近くにお越しの折、あるいは電子メール等で、学校・学科・教職員にアクセスください。近況・要望・苦情?等、お聞かせいただければと思います。どうか、お元気で活躍ください。



「はつめまつり」
西村 一寛

同窓生の皆様、はじめまして。豊橋技術科学大学から本校電気電子工学科へ赴任して参りました。出身は大阪の交野市というところ。高専こそ違いますが、皆様と同じく高専出身者でございます。私の高専時代はロボコンに力を注ぎました。夏休みはもちろん授業も休講にして頂いたりしてロボット作りで没頭しました。とても効率的ではなかったのですが、大変楽しく過ごしました。その縁もあって現在、ロボ研を担当させて頂いております。本学の力強い支援体制には驚きましたが、ロボコンが当時とは比べることができないくらい高度化しているため、既に予算が残りわずかとなってしまいました。それでも、今年のおロボコンに向け夏休みも返上で土曜日も活動をしている学生の懸命さには感動しております。勝負の世界ですので何が起こるかわからないのですが、今年はいい結果になることを心から祈願しております。皆様にも是非応援して頂きたくお願い申し上げます。

生物応用化学科の近況 長原 滋 (52C卒)

卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。本学科各スタッフの近況などをお伝えします。

松田 正徳教授：アベペースを守り、教育、研究に従事。生物応用化学科の1回生の3、4年担任、バドミントン部顧問、実に楽しかった。平成16、17年度、学科主任として、5年生の進路、特に就職業務で、汗をかいた。就職先で頑張ってくれることを期待して汗を拭いた。平成18年度、全国高専体育大会バドミントン競技(舞鶴)で男子団体戦三位入賞を果たしてくれた。定年までの期間、学生と楽しく界面化学、触媒化学を学んでいこうと考えていたら、さらに、二年間再雇用教員の任が与えられた。感謝、感謝。

富澤 好太郎教授(寮務主事)：1年が非常に速く過ぎていくように感じています。毎年新しい学生に接し気持ちを新たに授業や卒研に取り組み、年をとり頑固になったといわれぬように気持ちだけでも若さを維持しようと思っています。勉学意欲・部活意欲・研究意欲の旺盛な学生に恵まれ、楽しく優しく卒業研究等に取り組んでいます。

杉山 利章教授(学科主任)：時間雨量100ミリを越える集中豪雨と遅い梅雨明け、資源をめぐる理不尽な領土争い、日本で世界各地で頻発する非人道的な所業、天も地も人も、今までにはないことが既成の如く我々の生活に関係してくる昨今、それらの対応には若い人たちの熱意が必要です。卒業生の皆さんの精進を楽しみにしています。

内藤 幸雄教授：生物応用化学科の一員として、授業や卒業研究に取り組んでいます。5学年の担任業務に取り組み、外部資金導入の一環として、平成15年度から植物由来の糖尿病予防特定保健食品の開発を始めました。昨年3か年の文部科学省研究助成を受け、歯周病の研究を再開しました。

生貝 初教授(応用物質工学専攻主任)：平成18年度の専攻科応用物質工学専攻(C科、S科出身学生が在籍)の就職状況が大変良く、来年もこの状況が続くようにと祈るばかりです。今後とも先輩諸氏からの一層のご支援、ご助言を賜りたく、よろしくお願ひ申し上げます。また、研究の方では細々ながらようやく成果が出てきました。こちらも来年も何とか続きますようにと神頼みしております。

岩田 政司教授(工業化学科S50年卒)：鈴鹿高専は、平成17年度に大学評価・学位授与機構による「高等専門学校機関別認証評価」を受審し、11の評価項目すべてにおいて基準を満足しているという評価結果を得ることができました。鈴鹿高専の技術者教育をますます充実・発展させるため、卒業生のみなさんのご支援をお願いします。

澤田 善秋助教授(工業化学科S50年卒)：赴任後、3年目となりこの春、研究室としても初の卒業生を送り出しました。昨年度より始めたカーボンナノチューブの作製に加えて、鈴鹿の伝統産業でもある“鈴鹿墨”もさわり始めました。伝統産業は長年の歴史があり、工学的なアプローチもなかなか難しいものがあります。もうひとつのテーマ

として、ミニチュア蒸留塔の作製と自動制御にも取り組んでいます。将来的には、実験室をミニチュア化学プラントにしてみたいと思っています。

長原 滋助教授(工業化学科S52年卒)：これまでいろいろな分野の授業を担当してきましたが、現在は有機化学系の授業科目のみを担当しています。研究分野と一致しているため、つつい欲張った授業内容になり、配布プリントも多くて、学生諸子からは不評です。卒業・特別研究は、学科学生5名と専攻科生1名を担当しており、環境にやさしい有機合成反応の開発に関するテーマに取り組んでいます。

下野 晃助教授(工業化学科S58年卒)：今年は残念ながら全国高校ウオーターポイズ選手権自体が開催されませんでした。高専祭でのシンクロナ公演にむけて練習しています。高専祭での公演をよろしければご覧においでください。

中山 浩伸講師：2003年4月に外資の製薬会社よりここにおります。分子生物学を基盤に研究を行っています。自分で考え、その場の状況にあった行動を積極的にとれる自律・自立性を持つ人材が育つようがんばっています。

高倉 克人講師：赴任して2年目になり、今年度から卒業生が配属されました。高専5年生の研究指導を行うのは初めてなため、とまどうことも多々ありますが、学生のスキルアップとともに、私自身の教員としてのスキルを向上させていきたいと思っています。部活動の方では今年度より、中学・高校とやっていた柔道部の部長補佐を勤めさせていただくことになりました。技術的な指導を行えるわけではありませんが、時間のあるときには道場で部員に相手をしてもらい、運動不足の解消に努めております。

淀谷 真也助手：赴任から3年半が経ちました。現在研究生は専攻科生一人、学科生二人の三人です。今年こそは研究成果を上げるぞ!と毎年思っていますが、なかなか思うようには進んでいません。クラブでも全国大会への切符を逃し、これまでの連続出場を止めてしまいました。今は我慢のときかも知れませんが、頑張ります。

堀井 一夫技術専門職員：生物応用化学科を卒業されたみなさんは社会、学校で頑張っていると思います。本校も生物系と化学系の2本立てとなり変化に富んできました。私も百姓(植物相手)を楽しんでいます。また、各先生の顔を見に来て下さい。

伊東 真由美技術専門職員：2000年4月より生物応用化学科の技術職員を務めています。仕事を楽しむ余裕を持ちたいと思う毎日です。

材料工学科の近況 井上 哲雄 (46H卒)

・**小倉先生**・・・研究主事・地域共同研究センター長として、産学官連携や地域連携活動を中心に取り組んでおられます。また昨今話題になっている燃料電池プロジェクトの中心的メンバーとして三重県や鈴鹿市との共同事業にも深くかかわっておられます。この平成18年度ご定年で退職予定です。

・**国枝先生**・・・学科主任や専攻主任、材料科学研究センター長などを歴任されていましたが、18年度は久しぶりに公務から解放され、研究に打ち込んでおられます。セラミックスの焼成に、従来の外部加熱方式に比べ、短時間で高速処理できるマイクロ波による内部加熱のプロセッシングをテーマとした研究を進められています。

・**江崎先生(S52H卒)**・・・専攻副主任・副地域共同研究センター長として、専攻科生の教育研究の指導および産学官連携や地域連携活動を中心に取り組んでおられます。酸化チタンの光触媒特性の向上、次世代半導体チップ用の異方性導電フィルムの開発や鉛フリーはんだの開発に必要なSn合金の特性についての研究を進められています。

・**岡部先生**・・・本年度は担任業務から解放され、教育・研究に打ち込まれています。特に腐食、表面処理の分野で研究を進められており、最近は種々の機能めっきにも取り組んでおられます。

・**小林先生**・・・本年度は4年材料工学科担任で、夏季休暇中の学生のインターンシップ割り振りにご苦労されておりました。バスケットボール部の顧問として全国高専大会への引率(東海地区大会優勝)など、学生指導でもご尽力されています。金属多層膜の合金化による耐食・耐摩耗皮膜の開発、金属バルク単結晶の育成および結晶成長機構についての研究に取り組まれています。

・**兼松先生**・・・創造教育部会長として創造教育やe-learningに積極的に取り組まれ、その分野では全国高専に「鈴鹿高専に兼松あり!」と知れ渡っています。熱処理と表面処理全般、とりわけ、熱が表面にかかる際に起こる現象に強く関心を持って研究を進められています。

・**下古谷先生**・・・本年度は5年材料工学科担任で、学科主任を補佐して進路指導をされています。8月に行った材料工学科公開講座(中学生対象)においては、中心的に動かれました。オカラを中心に有機系廃棄物のマイクロ波処理による有効利用に関する研究に取り組まれています。

・**和田先生**・・・本年度は3年材料工学科担任で、特に女子学生の割合が多いクラス(女子16名)であり、それなりに苦労されてクラス運営をされています。光機能特性を有するガラスおよびセラミックスの研究を進められています。

・**黒田先生(h05S卒)**・・・つくば市にある(独)物質・材

料研究機構から転任されてきた、本年4月採用の新進気鋭の先生です。とはいっても鈴鹿高専材料工学科の卒業生でもあり、高専のことはよく知っておられますので、もう長年鈴鹿高専にいるように溶け込んでおられます。

・**南部先生(h02H卒)**・・・名古屋大学大学院工学研究科で内地研究員として研究に打ち込んでおられます。これが発行されるころには博士(工学)の学位を取得されて、鈴鹿高専に戻られていると思います。

・**猿渡技術職員**・・・就任して10年目になります。現在は1~4年の学生実験を担当しています。また、SEMなど測定機器を操作することで、先生方の教育研究のお手伝いをしています。

・**宮崎技術職員(h14S卒)**・・・本年4月より技術職員として採用されました。おもに1年生から4年生の工学実験と材料工学科の学科事務を担当しています。各種測定機器のオペレータになるべく日々勉強を重ねております。

・**梶野先生**・・・昭和43年に着任されて以来、金属工学科・材料工学科において教育・研究一筋に打ち込まれ、平成18年3月末をもってご定年で退職されました。在職中は学科主任、図書館主事、専攻科長などの要職を歴任されています。現在は週に1回、非常勤講師として学生の教育にご協力いただいています。

・**井上(S46H卒)**・・・昭和46年に鈴鹿高専金属工学科(現在の材料工学科)を卒業して、はや三十余年が経過しました。本年度は国枝先生から学科主任の職務をバトンタッチされ、5年生の進路指導に初めて望みましたが、進学(編入学)および就職いずれもスムーズに進み、ほとんどの学生が希望のところに進めることが出来ました。アルミニウム合金のリサイクルおよび金属材料の不純物除去による高純度化に取り組んでいます。



新任卒業生教職員



23年間の時を経て

23年の時を経て、この4月より庶務課技術室に勤務することになりました。専らの職務は学生の物理実験支援と産学官協力支援です。産学協同推進センターの実験室に席を置いていますので、気軽に立ち寄って頂けると幸いです。

23年ぶりの母校は、馴染みの先生方がまだいらっしゃり懐かしさがありますが、学生の自由な雰囲気と女子学生の多いこと、そして教職員に卒業生が多いことに驚いています。自分もそれだけ年を取ったのか…。



23年前、世界にはまだ東西の壁があり外国とは縁がなかった、少なくとも自分が外国語を話す必要などないと思っていた。技術分野では、学校で習う標準と言えばJISくらいで、規格・認証など言葉も知らなかった。ところが、世界はあっという間に変わりボーダレス、ワールドワイドになり、日本人に馴染のない規格・認証・製品安全なる言葉が世の中を席卷するようになった。ご他聞に漏れず、ある日突然、某商品を世の中に出したことをきっかけに、金属屋が現在の経済を牽引するIT&C(情報通信機器)の国際規格IEC 60950(次期IEC 62368)、電気電子機器の心臓となるトランスと小型電源の国際規格IEC 61558の開発に携わり、この10年間はIEC国際会議に計23回も参加、訪れた国は27カ国。世界の名立たる企業、試験所等々の方々と席を共にし、冷や汗を掻いてきました。

森 邦彦 (58H卒)



写真は、ある日のIEC国際会議と南アフリカの喜望峰を訪れた時の一コマです。そんな経験も学生に伝え、そして社会に還元して行きたいと考えています。

黒田 大介 (h05S卒)



である本校学生にご支援頂けると幸いです。

皆さんもきつと食べたであろう青春の味「唐揚げセット」、「唐揚げカレー」さらにマヨネーズも健在です。あの味が懐かしかったら、鈴鹿高専にたまには遊びに来ませんか？



鈴鹿高専を卒業されたOB・OGの皆様、お忙しい毎日をお過ごしのことと思います。昭和最後の材料工学科の入学生となったS63の黒田大介です。母校である鈴鹿工業高等専門学校材料工学科に平成18年4月1日付で講師として赴任いたしました。本校卒業後、豊橋技術科学大学に編入学し、大学院終了後はつくばにある「独立行政法人物質・材料研究機構」にて医療用金属材料の実用化研究を行っていましたが、ご縁があって本年度より本校にお世話になっています。13年振りに鈴鹿に帰郷し、また懐かしい学び舎で後輩となる学生たちとともに充実した時間を過ごせることをとても嬉しく思っています。

お世話になった先生方も昔と変わらずに大変お元気で、私が授業を受けていた頃と「講義の勢い」は衰えており

ません。厳しくも楽しかった低学年の全寮制廃止(あのラーメンコーナーもなくなり、今は綺麗な補食室が各寮の各階にあります)、単位取得制度、授業時間の100分化など、学生を取り巻く教育環境は大きく変化しましたが、「知・徳・体の全人教育」や「不動心」の精神は今でも学生たちに受け継がれています。既存の体育会系および文化系のクラブ活動に加えて、ウォーターポイズ、ソーラン節、ロボコン、ソーラーカーなどの「新しいクラブ」が好成績を収めて大活躍しており、鈴鹿高専の学生生活に新しい流れを築いています。私自身の大学生活や社会人としてのこれまでの経験を学生に伝えつつ、次世代を支える自信あふれる優秀なエンジニアを世界に羽ばたかせたいと思っています。OBならびにOGの方々には、今後とも後輩



平成13年度に専攻科を修了し、山口県にある徳山工業高等専門学校で4年間働き、今春に転勤して参りました。高専を卒業して4年間で母校に戻ったということで、私が在学中の先生方もまだまだ居られますが、野球部では長瀬治男先生、電気工学科(現電気電子工学科)では山口慎二、山本賢司先生が定年退職されました。他の学科でも、数名の先生方が定年退職されました。そう考えると時代の移り変わりの早さを感じるともに、母校とは何かと考える時があります。そして、その中で自分自身がどれだけ成長できたかという自問自答の毎日を過ごしています。まだまだ未熟者ですが、少しでも母校のために力添えできるよう精進したい

と考えております。また卒業生の皆様におかれましてはご指導、ご教示の方をよろしくお願い申し上げます。

最後に徳山高専の紹介を少しさせて頂きます。瀬戸内海に面しており、小高い山の上にあります。そこからの景色、夜景は個人的には高専の中で一番ではないかと思えます。また、4年前には女優の長澤まさみさん主演の映画「ロボコン」の舞台となった学校です。校舎はもちろん、出演者の大半は現役の高専生、教職員です。また機会があればぜひ鑑賞してみてください。今では山口県での経験又はそこで出会った人々は私の大事な宝です。

板谷 年也 (h12E卒・14D修)



新任のご挨拶

この度4月1日付で、庶務課技術室に採用されました宮崎と申します。生まれも育ちもここ鈴鹿市の私ですが、母校であるこの鈴鹿高専でまたお世話になるとは在学中は思ってもみませんでした。もう4ヶ月が過ぎようとしています。

「将来の夢はお嫁さん」と言っていた保育園児のころから、サッカー少年団に入っていた小学生時代、親に頼まれしつぱサッカーを辞めてバレーボールを始めた中学生時代、そしてサックスがかっこいいと始めた高専時代を経て、今では作業着に安全靴で仕事をしています。身長も173cmと比較的高

いため、短い髪の毛のときは黙って歩いていると男の人と間違えられたりしましたが、今ではみなさんに覚えていただきあちこちで声をかけてもらえるまでになりました。

現在は技術室員として材料工学科に配属され、毎日工学実験の準備や学科事務に加え各種イベントのお手伝いをしています。諸先輩方々、各先生方々のアットホームな雰囲気に囲まれ、恵まれた環境での仕事に幸せを感じつつ、いっそうの努力・精進を重ねていきたいと思っておりますので、皆様のご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いたします。

宮崎 みよ (h14S卒)



退職教職員 (「鈴風」より転載)

高専での生活を回顧して

一般科目(数学) 長瀬 治男



1. 昭和42年4月、赴任の為に木曾三川を越えて初めて三重県の土を踏みました。以来、穏やかな気候・豊かな自然・細やかな人情・厳しくも暖かく見守って下さった初代木村校長を始めとする諸先輩・短気でせっかちで我が儘な性格から色々無理をお願いをして嫌な思いをさせたのに不平も言わないで協力して頂いた同僚の皆様・年毎に顔ぶれは変わっても真面目で素直な学生諸君のお陰で今日まで鈴鹿高専の一員として生活して来ました。2. 赴任当時は、教職員に私のように学校を出た直ぐの人が多く、

学校全体が若さに溢れていました。第2代校長矢野先生をはじめとした運動好きな教職員が、学生と一緒に休日に体育館でバレーや卓球に汗を流したり、学科対抗の教職員ソフトボール大会で走り回ったのは懐かしい思い出です。

学生の球技大会には教職員チームがチームを作ってソフトボールに出場したり、体育祭のクラス対抗リレーでは担任(当時は、

担任補佐制度があり担任補佐も)が必ずどこかで走ることに決まっています、クラスの足を引っ張る先生が多く、日頃の威厳も何処へやらの光景が繰り広げられました。

3.本校の生活全般に対する学生指導は、この地区でも有数の力の入れようで、特に学寮生指導については全国の高専の寮関係者が手本とし、多くの視察者が本校を訪れたものです。全寮制は、その維持の為に全教職員が多くの精力を傾けてきましたが、時代の趨勢には逆らうことができず任意寮に変わりましたが、寮制を経験した多くの卒業生が彼等の学寮での生活が社会に出てから色々な面で役立ったと懐かしく語ってくれます。

4.私と上級生・卒業生との繋がりは、専ら野球部の活動を通じてでした。下級生だけを相手にしていたのでは見えにくい学生生活・学校や教職員に対する学生の意識・卒業後の会社での仕事・生活振りなどは、全て彼等から学んだことです。



定年退職するにあたって

十年を一昔というならば、私が本校に赴任したのはもう四昔前のことになるのかと今更ながら感慨深いものがあります。まだ学生気分が抜けきらず、西も東も分らなかった未熟な私が、曲がりなりにも38年間を無事勤められましたことは、初代木村校長先生はじめ、歴代の校長先生や先輩の諸先生方のご指導・ご薫陶ならびに私を支えてくださった事務職員の方々および若い先生方のご協力あったことと深く感謝致しております。

赴任当時は新生制度・鈴鹿高専の揺籃・充実期にあたっておりましたので、諸先輩の先生方の中には日帝大名賞教授、元海軍技術中佐(私の直属の上司)、会社重役、県教育委員会の指導主事をされた方など異色なカラーの先生方もみえ、多士済済の先生方に囲まれ、まさにシュトルムウントラング(疾風怒涛時代)の状態であり、未熟な私はこのような様々な人々たちによって鍛えられ、また育まれました現在の私があるものと思っています。

高専教育の理念に関する真剣な意見交換や議論がなされ、「学生はかくあるべきだ」という確固たる深遠・高邁な教育目標が掲げられていました。「逞しきエンジニアエンジェルマンの育成」、そしてさらに「西のイートン、東のスズカ!」、「全国の工業高専の先鞭たれ!」当時、学生を心から愛し、教育の理想を求め、強烈な個性の持ち主の初代校長先生指揮のもと、あたかも青年士官(じゃなかった?、一兵卒だったかもしれませんが)の心境で、私はこれらの教育スローガンに酔いしれて重荷を背負うがごとく、とにかくがむしゃらに走ったことでした。

20代や30代の頃は、そのような多彩な教師群の中でも、自分には最大の魅力・武器として「若さ」があるのだという意気込みで頑張ってきました。時移り、時代が変わり、今はもう学生諸君のご両親の年齢あるいはそれ以上になってしまいました。いわば急峻な山から転がり出た岩石が流下するに従ってあちらこちらにぶつかり、次第に角がとれて海岸近くに堆積されている丸石の姿に、自分を見出しているのかも知れません。

顧みますと、昭和44年の学園紛争、猛烈な台風来襲に悩まされながら開催した第5回全国高専体育大会(伊勢市)、約一週間続いた鼓ヶ浦海岸での遠泳訓練、愛知川、御在所岳、入道岳などの遠足、

お陰で視野が広くなり、下級生との拘わりの中でそれらが大きい役に立ちました。私の高専での生活が豊かであったのはこのお陰と感謝しています。

5.高専を取り巻く状況が、益々厳しくなっています。様々な計画・評価・点検の中で学生指導をはじめとする日々の学生との拘わりの部分が、中々それらに馴染まないもどかしさを感じています。

一人一人の学生にとってはかけがえの無い青春時代を過ごす本校での生活が、彼等に悔を残さないことを願っています。

一方で、学生の皆さんは同世代の若者と比べて色々な面で恵まれた環境にあることを自覚し、持っている才能を十分に発揮しないまま貴重な学生時代を終えることが無いように頑張りたいと思います。

本校の益々の発展を祈って別れの挨拶とします。

機械工学科 岡田 修

オハイオ州立大学への国際学術研究訪問、部員とともに楽しみながら、ともに汗を流した20数年にわたるソフトテニス部の部長経験、これらの諸経験を通じて自らも成長し、また、若い学生諸君から若さみなぎるガッツやパワーをもらったり、教えられたことも数々あり、健康体で退職の日を迎えられますことは、まさに教師冥利につくものと感謝致しております。これらの貴重な思い出は終生忘れることはないでしょう。

次に、学生諸君に申し上げたいことは、入試倍率が25倍であった創立当初も、4倍の現在でも、学生の本質(知的レベルや素質、感性など)はあまり変わらないと思います。若い諸君は、現在無限の可能性を秘めて成長・発展しています。指示待ち人間ではなく、自律行動型の、ハングリー精神の旺盛な、積極性と物事を最後までやり遂げる強靱な精神と体力を兼ね備えたエンジニアになってください。

私は機械工学科の学生には「諸君はエンジニアである前に、まず、教養豊かな人間でありなさい。」と常日頃から言ってきました。本校は早々とJABEEの認定校となり、国際的に教育システムは保証されるに至りました。企業の生産拠点がどんどん海外へシフトされている現在、諸君が海外のエンジニアと協力して仕事をする機会も多々あると思います。その際、仕事を共有すると同時にお互いの文化交流、異文化の相互理解が非常に重要になってくると思います。他国の文化を理解するための大前提は、まず、自国の歴史や文化を正しく把握・習得して、胸をはって説明できるようになることだと思っています。またそうすることのプロセスが、諸君が幅の広い、スケールの大きい、いわゆる「味のあるエンジニア」に育つことにつながると思います。単に仕事はできるが人間的に魅力のない人物になったのでは、生産ロボット(アシモ「ASIMO」がどんどん進化していることから分かるように)の延長線上に陥ることになるでしょう。

どうか、厳正な事実を受け止めて、心豊かな味のある人間的魅力にあふれるエンジニアに成長していただきたいと思っています。最後に、諸君達に、洋の東西を問わず真理をついている格言「鶏口となるも牛後となる勿れ(史記)」、

It is better to be the first in a village

than the second in Rome.

を贈りたいと思います。この概念なくして人間の向上発展は望めないのではないのでしょうか。諸君達のご健闘を切に祈念しております。

退職にあたって

平成6年4月1日に大阪大学から本校に転任して、早12年も経ち、この3月末日をもって定年退職する事になりました。

顧みますと鈴鹿高専の生活の中で本当に多くの幸運を私は頂いたように思います。赴任時は丁度桜が満開で好天が続く、大変清々しいスタートとなったことが強く印象に残っております。翌平成7年からは新築された専攻科棟の最初の住人として真新しいピカピカの居室や研究室を使用させて頂きました。更に、この年は高額な先端設備費の要求が採択され、希望通りのカラフルでモダンな高電圧インパルス発生装置を購入することができました。この装置は研究の他、学生実験、公開講座の雷モデル放電実験等にも使用され、電気電子工学科の主力設備となっております。私はこの装置による研究成果を毎年のように国内、外で発表する幸運も得ました。

また、学生諸君はとても素直で明るく、沢山の感動を頂きました。不肖の私ですが平成12年度から4年間ほどは専攻科の専攻主任、専攻科長を拝命し、専攻科や学校の運営にメンバーの一人として参加させて頂きました。この時は丁度JABEE受審、専攻科教員審査、中期計画・中期目標の策定等が重なり大変多忙な時期でした。その間はメンバーの方々と共に会議、資料作



退職雑感

昭和43年4月1日、本校に金属工学科助手として奉職して早や30年有余の歳月が経ち、人生の半分以上を本校で過ごさせて頂いたことになる。しばらくは隣県からの通勤で、近鉄急行のバラエティーに富む車輦が楽しみであった。白子駅は東側が本駅で西側に迎いのスクールバスが待っていた。三交バスも当時は車掌付きであった。その後、鈴鹿市民となった。

教科担当、学級担任、クラブ補佐、寮監、主事補、図書館長、材料工学科主任、専攻科長として学生の教育指導、校務担当にあ

夢を追い求めて

大学・高専職員として41年が過ぎようとし、あと1ヶ月少々で定年を迎えます。

41年前、就職した頃のことを最近よく思い出されます。当時、自分の夢が追い求められ、その夢を実現するためには公務員としてどこに就職したらよいか迷い、人事院に相談に行き、窓口で親切に対応して頂きました。その際担当の方から、「旅行が趣味なら、転勤があった方がいいですよ、国立大学なら全国にあるし、著名な先生方もたくさんいるし……」と言われて、この言葉を受け入れ、東京教育大学に就職したのが最初です。その後、北は北海道(帯広畜産大学)から、東北(弘前大学)、関東(東京教育

電気電子工学科 山本 賢司



成等で連日遅くまで、時には深夜に至る場合もあり、大変だったことがつい昨日のように思い出されます。

また、それと共に本校の大規模な組織の改編がなされ、各種委員会の他、多くの部会、ワーキンググループ等が設置されました。その中で特に若い先生方でも部会、ワーキンググループの長に推され、活躍されておられます。このような状況は更なる優秀な人材の醸成、延いては本校の益々の発展を予感させるような思いも致します。

12年前、当時の校長の戸田成一先生から「鈴鹿高専はいぶし銀のような学校ですよ」と言われましたが、私にとっては銀どころか金色に輝く素敵な学校でした。これまで大過なくやってこれたのも校長先生はじめ諸先輩の先生方、教職員の皆様方のご指導、ご支援に負うところが多く、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

本校の更なる発展と皆様方のご健康、学生諸君の益々の活躍のこと、祈っております。

材料工学科 梶野 利彦

たった。顔ぶれが変わる学年のサイクルを何回も送った。非力ゆえの色々な苦労・問題も今ではいい思い出になっている。西方の山々にも登れたし、東方の海浪に親しむこともできた。工業立国の基幹力を担う多くの若い技術者が着実に育っていった。

オイルショック、バブル崩壊を経て、技術会社も各方面で様変わり呈した。ものと情報めぐるしく行き交う時代のなかで、こつこつともの作りに楽しみを覚える若者が少なからず存在することに明日の光が期待される。

これまで一方ならぬお世話になった教職員の皆様と日々の元気を与えてくれた学生諸君に御礼感謝します。

事務部長 大西 博雄



大学→筑波大学)、東海(鈴鹿高専)、北陸(福井高専)、関西(日文研)と、さらに南は九州(熊本大学)にまで行くことができました。聖書のことば(「太陽の下、与えられたむなしい人生の日々、愛する妻と共に楽しく生きるがよい。それが、太陽の下で労苦するあなたへの人生と労苦の報いなのだ。[コヘレトの言葉9:9])のとおり、それぞれの地での生活を、文化を、郷土食を、また観光を、愛する妻と共に楽しく経験させて頂きました。このことは、私にとって若い頃からの夢が正に実現した思いで、本当に感謝

しております。しかし、それまでの間、多くの上司、先輩、同僚の方々皆々様に多大なご迷惑をかけましたこと、お世話になりましたことが一つ一つ思い出されます。ありがとうございました。

40年余りのこれまでの人生は、自分の夢を追い求め、自分のために生きてきました。しかし、少なくともこれから20年の人生は、さらなる10年先、その後の5年先における人生の夢の完成を目指し、人のために自分の人生をささげる、そのような生き方をしたいと考えております。ついでに住処としては、豊かな自然に

囲まれた岩手県小岩井農場のすぐ近く、岩手山が見えるところに構えました。日々雄大な景色を眺めながら、地域でのボランティア活動に新たな夢を追い求めていくことを予定しております。

最後に、鈴鹿高専での3年間、本当にお世話になり、ありがとうございました。皆様方のご健勝と鈴鹿高専創立50周年への新たな目標に向けて更なる発展を、いつまでも遠く岩手の地からお祈り申し上げます。



定年退職に際し

庶務課技術室長
松村 哲

来てしまった此の日。25歳の誕生日(4月1日生れです)から35年お世話になった鈴鹿高専ともいよいよお別れです。省みれば先輩の言にも在るように苦しいこと楽しいこと色々在ったと思いますが、思い出されるのは"楽しい"ことばかりなのは"まか不思議"です。

私は民間会社からの"転職"組でした。まさか自分が"公務員生活"を送るとは?でした。右も左も分からない"公務員"生活で頂いた官命は"文部事務官"。そして数年後、お前の仕事は事務官ではない、変更する、で頂いた官命は"文部技官"と相なり、めでたく技術職員におさまりました。

民間会社のおときは"口先三寸渡る世間は嘘ばかり"で、接待費使い放題の"三流セールスマン"。大小の間屋、会社、APA(在日米軍調達局)、官庁(主に防衛庁)の調達局回りの私めが畑違いの技術職。

"笑って"しまいましたが、さすがに勉強嫌いの私が物理(其の当時はまだ理科ではない)の実験手伝いですから"慌て"ました。学生相手の指導では嘘もつけません。面接試験の時は"適当にやれば"のお墨付きを頂いていたのに"約束が違う"でした。

実験指導書を見ながら1月半真面目に勉強しました。学生実験は10テーマ、教官1名と私でやるわけですから当然5テーマ担当と思っていましたが、優しい教官は私の"趣味"である弱電とX線の実験を廻してくださいました。そこで始めて"趣味"がお金(実益)になることが理解できました。2年、3年とたつうちに実験も全て覚えてしまいそうになると"欲"が出るようになります。欲がでるといことは"不満"も出る事につながり、それを叶えられない時、程度の多小に個人差がありますが、今で言う所の"うつ病"らしきものへと移行してしまいました。自分でいろいろ考え悩み出した答えが"やめる"か"遊ぶ"かでした。

が、鈴鹿高専は心の広い寛大な職場環境であり、当然のごとく"遊び"を選び、仕事に熱が入らず、当時の庶務係長から再三指導を受けることを繰り返しながら今日に至るわけですが、気がつけば廻りの諸先輩方は1人、2人と去り、とうとう自分の時間が止まる日が来てしまいました。

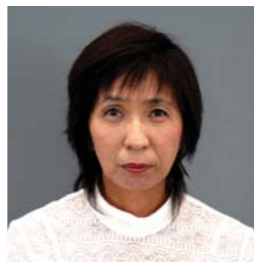
楽しく遊び(仕事)が出来る環境、心の広い鈴鹿高専、及び教職員の方々"感謝"合掌。

将来どのように発展変貌向上するのか楽しみな"鈴鹿高専"の未来永劫を祈りつつ、心おきなく去らせていただきます。

鈴鹿高専学生教職員に心より love and kiss 73

情報処理センターとともに

庶務課技術室
井上 昌子



昭和48年の電子計算機室新設と同時に鈴鹿高専に勤め始め、卒業証書を頂ける処まで歩んでこられました。「計算機って?」という私に、初代の計算機室長のお陰で勉強する機会を得ることが出来、受験勉強もこのくらいしていればと思う日々が続きました。

幸運なことに最初に出会ったプログラミング言語FORTRANは非常にシンプルで単細胞の私に向いていたようで、いつのまにか学生さんと一緒に勉強しながらエラー探しをし、プログラムを完成することが楽しみになっていきました。

大きな転機を迎えたのはパソコンとBASIC言語の誕生でした。廻りの皆さんに助言を頂きながら本校の成績業務プログラムの開発に携わったことです。入学試験の成績を初めて取り入れたときの事は今でも忘れられません。入試の本番に備えて年末年始の休暇は朝から晩までパソコンと向き合い、チェックを試みるという作業の繰り返し、結果発表が無事終わるまでは針の筈に

座った心地でした。私はよき時代にコンピュータと関わってきたように思います。

現在また1、2年の学生さんと一緒に勉強をする機会を得ました。ちょっとしたことで躓いているときに助言をすると有り難うという言葉が返って来たりします。こんな時、本当にこの仕事をしていて良かったと思います。学生気質も随分変わってきたといわれますが、一人一人は素直で優秀な鈴鹿高専の学生さんたちです。私が無事今日を迎えられたのは、情報処理センターという学生さんと密接な環境の中で過ごさせて頂いたこと、コンピュータの専門知識の無かった私を最後まで助けて下さった周りの皆様がたの援助、そして昼休みの日課であったテニスのお陰と感謝しております。

最後に、皆様方のご健勝と鈴鹿高専のますますのご発展をお祈り致します。

鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジーネットワーク(SHTN) 第7回総会・第13回技術交流会を開催

生物応用化学科 澤田善秋(50C卒)

平成18年7月22日(土)に第7回総会と第13回技術交流会をマルチメディア棟視聴覚室において開催し、卒業生(41名)、一般参加(6名)も含め47名の方に参加いただきました。特別講演として、長者番付・全国45位の(株)ULイーペックスの上島 憲社長(48H)に講演をお願いしました。また、若手の代表として砂原絵美さん(H14C)、田中通さん(H06E)にも講演いただきました。その結果、昨年の参加者(28名)、一昨年の参加者(21名)を大きく上回り盛会のうちに終えることができました。



第7回総会・第13回技術交流会参加者の皆さん



上島さんの講演



砂原さんの講演

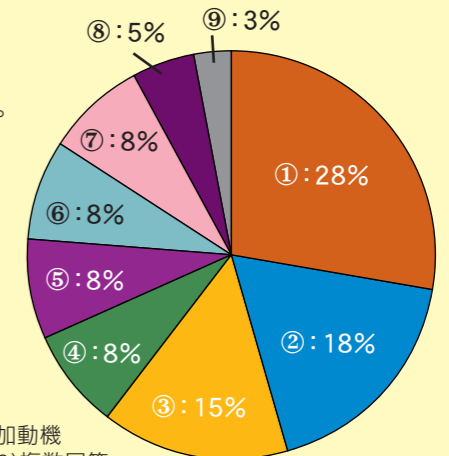


田中さんの講演

技術交流会参加へのお願い

参加者増員を目的に、参加の動機を伺ったところ、右の結果となりました。特別講演に興味を持たれた方が27%と最多でしたが、卒業生と交流を図りたい(18%)、学校・教員と連携を保ちたい(15%)、同級生の講演(8%)、懐かしい(8%)と多様な動機、需要があることも分かりました。今後、更に交流会を発展させるべく、学内幹事を中心にテーマ選定、開催方法等を議論していきたいと考えています。今後とも、SHTN会員の増大、技術交流会への参加にご協力をお願いいたします。

- ① 上島 憲さんの特別講演に興味があった。
- ② 異分野で活躍している卒業生との交流を図りたい。
- ③ 学校あるいは教員との連携を保ちたい。
- ④ 可能な限り毎回、参加している。
- ⑤ 同級生の講演がある。
- ⑥ 懐かしい(同窓会的雰囲気)
- ⑦ 世話役に誘われたから。
- ⑧ 若手の講演に興味があった。
- ⑨ 女性の講演に興味があった。



交流会への参加動機 (アンケートより)複数回答

笠井幸郎先生との思い出二つ

生物応用化学科 松田正徳



1. 東名高速道路が、まだ全通してないころ、先生の愛車ベレットGTで富士五湖めぐりを楽しんだ。特に、忍野八海から眺めた富士山は絶景であった。そのころの先生の愛用カメラは、「ゼンザプロさん」で、そのとき写した「忍野富士」を記念にくださった。

「駿河の表富士も魅力的だが、甲斐の裏富士もそれ以上に魅力的。」と物事の表裏を見ることの楽しさと大切さを教えてもらった。

2. 大学、高専等の職員スポーツ大会があるので「お

前も、バドミントンの練習をしなよ。」と誘われて、バドミントンを始めました。これが、その後、鈴鹿高専バドミントン部の部長、顧問として、学生指導を担当することになる発端です。

先生の強引なまでの誘いのおかげで、強力なメンバーがそろい、職員スポーツ大会バドミントン優勝に輝きました。「人を引っ張って、目的を達成するコツ」を見せてもらいました。また、バドミントンが私の生涯のスポーツになりました。ありがとうございました。

平成17年度 青峰同窓会 会計報告書

収入の部

摘要	金額(円)
平成16年度からの繰越金	40,571,182
平成16年度卒業生 入会金・終身会費	2,266,000
預金利息	10,449
合計	42,847,631

支出の部

摘要	金額(円)
会報発行経費	719,657
事務費	10,080
次年度へ繰越金	42,117,894
合計	42,847,631

平成18年度 青峰同窓会 会計予算(案)

収入の部

摘要	金額(円)
平成17年度からの繰越金	42,117,894
平成17年度卒業生 入会金・終身会費(216名)	2,376,000
合計	44,493,894

支出の部

摘要	金額(円)
総会、理事会等の会議費	50,000
会報発行経費	1,000,000
事務費	50,000
次年度へ繰越金	43,393,894
合計	44,493,894

編集後記

今回の会報発行に向けての原稿編集も終わろうとしていた頃、笠井幸郎名誉教授の訃報が届きました。その半月ほど前には、物理の石岡繁雄先生がお亡くなりになりました。急遽、生物応用化学科の松田先生に「笠井先生を偲んで」と言うことで文章を書いていただきました。

また、「卒業生便り」をお願いしました46M稲岡さんが47E山本さんの便りの中に登場し、あまりの偶然

の事にびっくりしてしまいました。卒業生の方や企業の方とお話していて、「思わぬところで、鈴鹿高専の卒業生が身近にいたことに最近気がつきました。」とよく聞きます。この青峰同窓会会報が、そのようなきっかけを作ることがあれば、編集に携わっているものとして嬉しく思います。そのような小さな事でも、同窓会へ連絡していただければ幸いです。

北村(47E卒)

誌名 青峰同窓会会報
発行日 2006年11月

発行

国立鈴鹿工業高等専門学校 青峰同窓会 広報委員会
〒510-0294 鈴鹿市白子町 ☎059-386-1031
E-mail/almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページアドレス

<http://www.suzuka-ct.ac.jp/~almn/>